



キリシマツツジ



当時の景石(左)とレプリカ(右2つ)



建物に伴う白玉砂利敷の空間



景石レプリカ製作



整備工事状況全景



シモツケ



イロハモミジ



出土した白玉砂利(佐賀県産)



ゴヨウマツの植樹



発掘された景石

# 戦国時代末期 最大級の 大庭園が 蘇る



同時代にあった戦国大名館庭園の中でも、最大級の大きさであることが分かった『大友氏館跡庭園』。そんな大庭園が今年、史跡公園として完成しました。実は、遺跡を発掘して当時の姿を現在に蘇らせた庭園は、全国でもほとんどありません。それだけに、発掘も再現も前例のないことばかり。時を超えて、往時の庭園を蘇らせるためには、詳細な調査と丁寧な発掘から導かれる事実の発見、そして担当者たちの熱意が必要でした。

まず、大庭園の発掘のきっかけになった巨石。これは池の東側に置かれた景石(庭石)でした。数ある景石は池の印象を決める大事な存在で、再現にもこれまでにない取り組みが行われています。遺跡は保存のために埋め戻すことが基本のため、実は東側の景石はレプリカを多用しています。型をとって大きさも形も寸分たがわず再現し、位置も変えていません。小さな河原石も、発掘を元に当時の大分川でも拾っていたような石と同じような姿形のもの敷き並べています。一方で、西側の景石は状態が良好であったため、出土した状態を見られるように工夫しています。450年の時を超え、当時の姿をとどめながら現在に蘇った巨石です。「宗麟公が触れたかも!？」と想像しながら、その石を間近で見てもみるのも醍醐味の一つです。

植物の再現は当時の池の堆積層の土を調査・分析し、種子や花粉が特定された11種類の樹木を植えています。配置については、樹木の植えられていた痕や当時の風景を描いた絵巻物、庭園を詠んだ歌などを参考にしながら、庭園の専門家とともに再現に取り組みしました。その木々が植わっている築山は、池を掘ったことで出てくる土の量を算出して、その土量を盛りあげています。池の中にある「中島」は、緻密な観察をする中で人工の盛土と自然に堆積した土の境を発見し、ゴヨウマツの位置を含め、ほぼ忠実にその姿を蘇らせました。

そんな詳細な調査と発掘、研究を繰り返して、広大な庭園が再現されました。巨石をダイナミックに組み合わせた、躍動感のある池の東側。それに対して、巨石をあまり使わず水面を広く見せた、穏やかな景色の池の西側。趣向の違う2つの景色を、ひとつの空間で表現しているというのも『大友氏館跡庭園』の特徴です。実際に庭園の中を歩くこともできます。「この景色を宗麟も見ていたのか」と、歴史ロマンに思いを馳せながら楽しんでください。



市教育委員会事務局  
教育部文化財課主査  
五十川 雄也さん

『大友氏館跡庭園』の発見には、奇跡と呼べるような偶然が重なっています。僕たちは今、発掘調査により受け取った先人たちからのメッセージを、後世の人たちに伝えていかなければならないと感じています。